



日本全国 能楽キャラバン！
in 東京



喜多流公演 番組

翁

香川 靖嗣

千歳 野村眞之介
三番叟 野村拳之介

大鼓 亀井 洋佑

脇鼓 飯富 孔明

小鼓 大倉源次郎

笛 杉 信太郎

協鼓 田邊 恭資

後見 内田 安信
塩津 哲生

地謡

佐藤 寛泰 谷 大作
栗谷 充雄 大村 定
栗谷 浩之 出雲 康雅
友枝 真也 栗谷 明生

狂言

佐渡 狐

シテ・奏者

野村 萬

アド・越後の国の百姓

アド・佐渡の国の百姓

河野 佑紀
野村万之丞

休憩（二十分）

能 夢 殿

後シテ・聖徳太子
前シテ・老翁

中村 邦生

ワキ・僧 森 常好

大鼓 柿原 弘和 太鼓 金春惣右衛門
小鼓 森澤 勇司 笛 藤田 貴寛

アイ・門前の者

野村 万蔵

後見 友枝 昭世
友枝 雄人

地謡

塩津 圭介 内田 成信
大島 輝久 狩野 了一
佐々木多門 長島 茂
佐藤 陽 金子敬一郎

附祝言

―― あらすじ ――

「翁」（おきな）

「翁は能にして能にあらず」と言われ、他曲とは別格に扱われ、形式が全く異なり天下泰平、国土安穩、五穀豊穡を祈る神事として演じられ、戯曲的な構成はない。初めに〈翁渡り〉といい、千歳、翁三番叟につづき、素襖、侍烏帽子の最高礼装の囃子方、後見、地謡方の順に出て、三番叟以下は橋掛かりで待ち、正面での翁の一礼の後、一同所定の位置につき、演奏が始まる。まず、三挺の小鼓が打ち出し、翁の謡出しにつづき、千歳が舞いを始める。その舞の間にシテの翁は白式尉の面（切顎という顎のところ2つに分かれ、飾眉を貼り付けた他にはない特色です、また目をへの字にくりぬき笑いと福顔をたたえている）をつけ終わり、荘重な翁の舞となる。舞終わると面をとり、礼をして退場する。これを〈翁帰り〉という。この後三番叟の舞となり、始めに面をつけず、掛声を掛けながら舞う〈採の段〉を舞う。その後黒式尉という面をつけて鈴を振りながら舞う〈鈴の段〉の舞の後、面と鈴を置き退場し、演奏がおわる。

（約六十五分）

「佐渡 狐」（さどきつね）

都へ年貢を納めに行く途中で、同じ目的である越後の百姓と佐渡の百姓が出会った。同じ百姓で気が合ったのか旅を続けると、越後の百姓が「佐渡には狐がいらないだろう」と言う。悔しさのあまり佐渡の百姓は「佐渡にはたくさん狐がいる」と言い張り、刀を賭ける。しかし佐渡には狐はいない。狐を知らない佐渡の百姓は都の領主の館の奏者へ賄賂を使って狐が佐渡にいることにしてもらい、狐の姿を教わった。越後の百姓と裁断を仰ぐと越後の百姓は佐渡に狐がいることに驚く。そして館から出た後に、今度は狐の鳴き声を聞かれてしまう…。

（約三〇分）

「夢 殿」（ゆめどの）

東国の旅僧が法隆寺に参拝し、夢殿に向かう。そこへ老翁が現れ、おもむろに先導しつつ、行信僧都の発願、三経義疏にまつわる神秘的な説話などを語り、太子が片岡山において飢人をあわれみ救われたことから、太子の生誕、十七条憲法の理念に及ぶ。かくて両者が相伴って飢人を葬ったひつぎの前に到ると、老翁はたちまち金色の光を放って消え失せる。（中入）後場は、聖徳太子が黒駒に乗って富士山上を駆けり、遠く北越の空を巡られたという説話によって、夢の精の化現が実相義・一乗法の発願高揚をしめす。「金色の人」というのは、太子が師として迎えた高麗の慧慈法師について、経文を講究せられたとき、その義を問われて、慧慈法師にも答えられないところがあると、太子の夢に「金人」が現れて、不明の個処を教えた。さめてのち太子は、その旨を師に伝え、師もまた領解したことが一再にとどまらなかったと、法王帝説などにあるのに拠る。かくして成った太子の三経（法華・勝鬘・維摩）の義疏は、「大委国上宮私集、非海彼本」としてされたほど独創的なものといわれる。

（昭和三十五年刊謡本「夢殿」喜多流新編入曲）より

（約八〇分）

終了予定時刻 午後四時十分頃